

## 研究の窓

### 疾病がもつ意味

疾病が個人と社会に対してもつ意味をあきらかにする必要があるのではないだろうか。病院というかぎられた場所ではあるが、さまざまな疾病をもつ方々に接してきた実感として、疾病という現象を受けとめるわれわれの態度は、その根底にある考え方をふくめて、みなおす必要があるという気がする。増大する医療費の負担、あたらしい医療技術のあつかい、高齢者の世話、治療法のない疾患への対策などの問題も、共通して疾病に対するわれわれの基本態度を問うているように思われる。

疾病は、いまだに特殊な状態とみられている。専門家と当事者以外は関係しないのが常識で、われわれは疾病を考えにいれない環境にすっかり慣れている。建造物や施設の大部分は、ときには病院までが、あたかも疾病が存在しないかのようにできており、組織などの運営も、疾病がその場がないことを前提にしている。中学・高校の教育は、疾病についてまったく考えないわけではないが、全体としては疾病というものがほとんどない空間になっている。これから、あたかも疾病のない状態が本来の人間社会であるかのような印象をうける。

現実には、疾病はまれでなくなっている。疾患をもちながら社会人として活動することは、すこしもめずらしくない。腎機能の全廃という重大な場合でさえ、血液透析によって何十年も社会活動をつづけることができる。個人の一生のなかで、疾病をもちながら生きる期間も長くなった。社会全体では、高齢者が増え、健康者は相対的に減りつつある。疾病は、ある意味ではごくありふれた状態である。今後も、医学・医療の進歩にともなって、疾病をもつ人は増え続けると予想され、いまや医療の最大問題は経済である。費用の面でわが国の医療はまもなくエネルギー不足におちいると予測され、欧米の経験を参考にしながら医療費を抑制する政策がすすめられている。

しかし、疾病を経済問題として処理しきれるものであろうか。すくなくとも、疾病に対するわれわれの考え方を、経済とはことなる観点からみなおしておく必要はないだろうか。

疾病は、プライバシーではあるが、当事者だけのものではない。生きることと不可分に結びついており、われわれは疾病からはなれて生き続けることはできない。また、今日の健康者は明日の病者であって、われわれ自身、現在あるいは将来の疾病の当事者にほかならない。家族や子孫をふくめると、誰もがきわめて多くの疾患と潜在的な関係をもっている。疾病は、ポリオや結核で経験したように、医療と予防によってひとつを解決してもつぎがのこる。生命に限界がある以上、すべての疾患を予防することは原理的に不可能である。この観点にたてば、疾病は、すべての個人が負わされている人類共通のリスクということができる。

疾病と人間との実際の関係のうえに、疾病観をたてなおせないだろうか。誰ひとり疾病を免れるものがないことを知れば、疾病のない状態を人間本来の姿とはみなせないだろう。人間は、もともと病むようにできている。ただ、疾病の明らかになる時期が誕生時から死の直前までさまざまであり、その持続が一瞬であったり一生であったりするにすぎない。人間社会は、かならずあ

る割合の構成員が疾病を帯びている。その割合は、医学の進歩とともに増大すると予想され、自分自身あるいは家族の疾病と無関係に生活できる者はますます少なくなるのである。健康者のつくる社会が本来の人間社会であるという観念はあきらかに誤っている。それは、人間の夢を述べたにすぎず、疾病をもたない人間だけで社会をつくることは不可能である。

疾病は、けっしてのぞましいものではない。疾病のもたらす身体的あるいは精神的負担を軽減する努力はつづけなくてはならない。疾病を肯定することはできないが、かといってあらゆる疾病から逃れられると思うのは幻想である。疾病は、生物であるわれわれが共有する運命であり、誰かがかならずその運命を身にひきうけてはならない。それは、生産活動が社会のどこかで行われなくてはわれわれが生存できないのと似ている。

疾病をもつ人は、人類が共有するリスクを身にひきうけているといえる。疾病をもつ人々が社会にもたらしている恩恵は大きい。臨床医学と医療は、多くの場合、疾患の経験をとおして進歩する。その恩恵をうけるのは、明日の病者である。さらに、われわれ自身も、われわれの社会も、疾病をもつ人とともにあることによってより人間らしくなっている。病者を、社会から恩恵を受ける者あるいは社会の負担になる者としかみない古い観念が、社会に対する病者の貢献を隠しがちだった。

現実に立脚するあたらしい疾病観は、疾病体験を明朗にするだろう。疾病を自分のものとして受けとめた人間は、疾病の有害性ばかりでなく、疾病をとおして得た利得をも自覚するだろう。たとえば、自分あるいは家族の疾病を経てはじめて代者への共感を人間の尊厳にふれるまで深めることもあるだろう。また、疾病がわれわれを真に謙虚にすることもあるにちがいない。筆者の知るだけでも、疾病の体験をとおして高い人格をあらわした人が、若い世代をふくめてじつに多かった。

疾病への対策は、医療の専門家と当事者にまかせるのではなく、社会の構成員ができるだけ多くの知識を中等教育の段階で勉強し、日常生活の一部として協力すべきではないだろうか。

黒川高秀

(くろかわ・たかひで 東京大学名誉教授)